

硫黄島で慰霊式典や戦跡巡り

日本文化興隆財団・日本青年会議所関東地区協議会

一般財団法人日本文化興隆財団(田中恆清理事長)と公益社団法人日本青年会議所関東地区協議会(佐藤友彦会長)が主催する「硫黄島訪問事業」が八月二十五・二十六の両日に開催され、参加した遺族や青少年など五十五人が大東亜戦争の激戦地となった東京・小笠原村の硫黄島を訪れ、慰霊式典や研修をおこなった。

この事業は、「国の歴史と向き合い、英霊に対して赤誠の心を捧げ、戦跡の巡拝をおこなふ中で、日本人として自国を誇れる歴史観を養ひ、確かな国家観を備へた人材育成をおこなふ」ことを目的に実施。同協議会が平成十九年からおこなっている事業に、今回初めて同財団が共催した。

硫黄島は、東京から南方約千二百五十キロに位置する、東西約八キロ、南北約四キロの離島。昭和十九年には千人を超える島民が暮らし、ハーブや砂糖



摺鉢山から望む、米軍が上陸した南海岸

慰霊碑に水をかける遺族



米軍は、日本本土を爆撃するB29爆撃機の中継点確保や、爆撃機に随伴する護衛戦闘機の基地確保などを目的に硫黄島に進攻した。これに対し、栗林忠道陸軍中将率ゐる日本軍は総延長十八キロにも及ぶ地下壕を掘って抗戦。昭和二十年二月十九日から一月以上互つ

訪島前日には勉強会を開催

二十五日の午後一時、

参加者のうち希望者が東京・靖国神社(徳川康久宮司)に参集。坂明夫禰宜が講話をおこなひ、自存自衛のため日本が戦争の道を選ばざるを得なかった経緯や、同神社の祭神について、約三十分互つて語った。

その後、一行は埼玉県入間市に移動し、市民会館で結団式を開催した。また、同協議会国民主権確立委員会の新井文人委員長が事業の趣旨を説明したのち、主催者を代表して佐藤会長が挨拶。「本

士防衛のため決死の覚悟を持って硫黄島を守らうとした人々の志を学ぶことが、先人が築いた今の豊かな社会を生きて、この国の未来を作り上げる私たちの使命だ」と述べた。引き続きおこなわれた

訪島勉強会では、海軍通信兵として硫黄島の戦いに参加した秋草鶴次氏が「十七歳の硫黄島」と題して講演。自身が十七歳の時に体験した硫黄島での凄惨な戦闘の様子などを滔々と語った。

最も近い海岸から約二百メートルに位置し、南西部の摺鉢山(標高百六十九メートル)がよく見える陣地で米軍の上陸を監視する任務に就いてゐたといふ秋草氏は、その様子を「人の帯が押し寄せ、海岸線の色が変はっていった」と述べた。戦闘が始まると、米軍の激しい攻撃を受けた陣地から鉄兜や腕が飛び光景が見えたといひ、「怨恨もないのに撃ち合ふ、なんで、なんで……これが戦争なのか」と当時の思ひを静かに語った。

米軍上陸から九日後、照明弾が常に上がり昼か夜かも分からないなか、秋草氏ら八人は北部の司令部壕へ移動。途中、海上からの艦砲射撃に曝されながらも、秋草氏はなんとか地下壕に駆け込んだ。しかし、この時に負った重傷のため三月二十六日の総攻撃には参加できず、米軍の捕虜となり

終戦を迎へたといふ。

秋草氏は最後に、「今の平和は三百万人の人柱が担保になってやっと作られた平和です」と述べつつ、「皆さんが健康で元気に一日も長く生き、今の平和を満喫する。これが戦争の犠牲者に対する一番の御恩返しです」と語った。

勉強会の後には懇親会を開催。遺族やその他の参加者らが親交を深めた。

都内の工業高等専門学校に通ふといふ十五歳の少年は近現代史に興味があるといい、「インターネットなどで簡単に情報が手に入る今だからこ

慰霊式典後、戦跡巡り研修

翌二十六日の早朝、航空自衛隊入間基地をC130輸送機で出発し、約二時間三十分後の午前十一時頃に硫黄島に到着。滑走路に降り立つと乍暖

そ、かつて戦場だった場所に実際に自分の目で見て、当時の人達の思ひを感じたい」と参加の理由を語った。

当日の気温は三十度ほど、覚悟してゐたほどの暑さではなかったが、



戦争の体験を語る秋草氏(左)、訪島後の意見交換会(右)



基地内にはガジュマルやハイビスカスが植わっており、硫黄島が確かに垂熱帯の気候に含まれることが窺へた。

基地内の厚生館で昼食をとった後、一行はバス三台に分乗して「硫黄島戦没者の碑」(天山慰霊碑)に移動。慰霊碑前に御酒、菓子、煙草などを供へ、慰霊式典を実施した。式典では、両主催団体が遺族、青少年の代表が拝礼。続いて、参列者が献花をおこなった。

式典後にはそれぞれが持ち寄った水を慰霊碑にかけ、当時、真水の確保に苦勞した英霊の御霊を慰めた。

その後、島で最も多く硫黄が噴出するといふ「硫黄ヶ丘」や、栗林中将が指揮を執ってゐた「兵団司令部壕」の場所を示す道標などを巡りながら、北部にある「海軍医療科壕」に移動。錆び



海軍医療科壕の内部

帰りの機内では、輸送機の大きな振動と轟音のなかでも目を閉ちてまごころむ参加者の姿が多く見られた。

午後六時頃、入間基地に到着した一行は市民会館に移動し、夕食を挟んで意見交換会を開催。参加者は六班に分かれ、「訪島前後の『国を想ふ気持ち』の変化」「この国の歴史を風化させないために必要なこと」などについて意見を述べ合った後、各班の代表者が発表した。

発表のなかでは、「訪島を通じ、先人の犠牲の上にこの世界が成り立っていることを身に染みて感じた」といふ感想や、「今後も引き続き若い世代に訪島していただき、硫黄島の歴史を次世代に伝えてほしい」といふ遺族の感想のほか、青少年から「壕の中の熱を体験するなど教科書だけでは伝はらない経験をすることで、歴史の風化を避けることができるのではないか」などいふ意見が寄せられた。

引き続き解団式がおこなわれ、同財団の森田文憲常任相談役が挨拶。慰霊式典の最中に会場を爽やかな風が吹き抜けたことに触れ、「英霊に喜んでいただけたのではないかと語りつつ、同事業が継続して実施されることを願った。

山形県鶴岡市・荘内神社(石原純一宮司)の近所に建つ致道博物館では「出羽庄内藩酒井家の遺品」が展示されている。▽意見、提言並びに記事・掲載論文への感想などは「言霊」欄へ。字数は四百字以内で。

投稿される方へ

「出羽庄内藩酒井家の遺品」

致道博物館

展示会

「出羽庄内藩酒井家の遺品」